

---

# Fate/Gold Saint 黒炎の姫君

九条 水菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e / G o l d   S a i n t                      黒炎の姫君

### 【Nコード】

N 6 4 3 4 Y

### 【作者名】

九条   水菜

### 【あらすじ】

「一緒に世界を壊そうぜ？」 ∴ 第五次聖杯戦争も終結し座に戻ったサーヴァントたちに、受肉させ新たな命を与えた男がさやく ∴ 「消失したアテナを探し出せ！」 ∴ 聖戦も終わり復活した黄金聖闘士達に下される教皇からの勅令 ∴ F a t e / s t a y n i g h t と聖闘士星矢がクロスオーバーした世界 ∴ ∴ 鉄骨の下敷きになって死んだ少女が目覚めた世界はそんな世界だった ∴ ∴

## 世界観について

どうも。九条水菜と申します。

さて…まずは、この世界の説明をしたいと思います。

舞台となるのは基本的に Fate / stay night の冬木市です。

…衛宮たちが3年生に進級したところから話を始めます。

第5次聖杯戦争はアニメ版沿いで進んだという前提で話を進めていきます。

……本編でも書きますが、この話では、ある人物によってサーヴァントが座から再び蘇生されます。

召喚ではなく蘇生です。8人のサーヴァントは皆、座から切り離され、肉体を持った状態で蘇生されます。

つまり、座から外れたので、『各々の知名度』に縛り付けられていない、本来の力が発揮できるようになっています。

あと、ストーリー上の関係で、葛木先生は生きていますってことでお願いします！

次に、この世界はただのFateの世界ではなく、一種の平行世界……です。『聖闘士星矢』の世界観が入っています。

星矢サイドでは、聖戦が終了し、『星矢を生き返らせたい』一心の沙織嬢が、三界会議を開き、星矢のついでに黄金聖闘士+を…それならばとハーデスがパンドラと冥闘士、ポセイドンは海闘士を復活させたということになっています。

聖戦が終わってから2年後なので、青銅たちも成長し、一輝と紫龍が穂群原学園の生徒として登場します。……ですが、一輝に関して言うと、放浪癖が激しいせいで留年をして紫龍と同じクラス…という事になっています。

ですが、話に絡んでくるのは主に黄金聖闘士です。

前聖戦に関してはLCを元にして進みたいと思います。

次に遊戯王に関してですが、これは現実世界とあまり大差ありません。

デュエルディスクにカードをセットしたらモンスターが！…ってことになるのは、異界から来た主人公のデュエルディスクだけです。

精霊が宿るのも主人公のカードだけです。

ペガサスや海馬…遊戯は存在していません。

デュエルモンスターズというゲームを生み出したのはグラーブ財団

ということになっています。

…原作のM & a m p ; Wの名前で、少しは社会現象になっていて、世界大会だけでなく様々な大会が行われています。ちょっとしたスपोर्ट्सみたいなノリ…というのが適当かもしれません。

なお、本編で決闘シーンは少ないです。

まあ…世界観はこんな感じです。

初見読者にも分かるように、『F a t e』や『星矢』や『遊戯王』を知らなくても読めるように書いていくように心がけます。

『「いこんとこどうなってるの?」って言うことがありましたら、お気軽に感想を書いてくれると嬉しいです。結構、捏造が多く、自己満足的な話ですが、よろしくお願いします。

## プロローグ（前書き）

えっと……まだ、F a t eキャラも聖闘士キャラも登場しません。

オリ 주인공の前世シーンです。

## ブローグ

1人の大人しい雰囲気の少年と、1人の大学生くらいの白髪でボーイッシュな感じの女が、公園で向かい合っていた。

まだ時間が早いので、2人が対峙する公園にはジョギングをしている人や、散歩に来ている年寄くらいしか見かけない……

だが…彼らが腕に付けている機械を見た者は、たとえジョギングをしていたとしても立ち止り、うつらうつらしてたとしても意識を2人に向けた。

「「<sup>デュエル</sup>決闘！……！」」

2人の声が重なり合ったとき、一陣の風が公園に吹き……空気はまるで戦場のような張りつめたものとなった。

少年	LP	4000
女	LP	4000

「いくよ、ねえちゃん！僕のターン、ドローカード……！」

少年が勢いよく、腕についている機械…デュエルディスクからカードを引き抜いた。

「……僕は魔法カード『超進化薬』を発動！これでこれから3ターン、僕はレベル関係なく恐竜族モンスターを召喚できるんだ！！

来い！！『究極恐獣』！！！！」  
アルティメットティラン

少年が声を張り上げ、恐竜の書かれたカードをデュエルディスクにセツトする。

何の変哲もなかった、ただの公園の地面が割れ………つといてもソリットヴィジョンシステム………いわゆる幻影の産物だ………つと分かっている。でも、漆黒の肉食恐竜が雄たけびを上げる姿は、鳥肌ものである。

究極恐獣 攻 3000

「僕はこれで終わり。花凛ねえちゃんのモンスターの上限は3000だよな？」

つまり、これを倒すなら相打ち覚悟じゃないといけないし、1ター



ンでコレを越えるモンスターを2対以上、召喚できるわけないよ！」

少年は誇らしげに言った……が、花凜つと言われた白髪の女は、やれやれ……と言った感じでカードを引く。

「アタシは魔法カード『天使の施し』を2枚発動。

6枚引いて、4枚墓地へ送る……その時に『暗黒魔族ギルファアーデーモン』を送ることで、効果発動！

このカードが墓地に送られたとき、相手モンスターの装備魔法になつて、500ポイント攻撃力を下げることができる。」

「……しまった……！」

究極恐獣	3000	2500
------	------	------

「……でも、2500級のモンスターなんて……」

「墓地にいる『トラゴエディア』『マシユマロン』を除外して、特殊召喚！『カオスソルジャー開闢の使者』……！」

青い衣をまといし騎士がフィールドに降臨された。

「さらに、『ホルスの黒炎竜LV4』を通常召喚する。」

白銀の人一人くらい乗れそうな鳥がフィールドに舞い降りた。

カオスソルジャー 開闢の使者 攻 3000

ホルスの黒炎竜 LV4 攻 1400

「ま…まずい!!」

「じゃあいくぞ。まず、開闢の使者の攻撃!! 『開闢双破斬』!!」

自身の体の倍以上の恐竜をいとも簡単に切り裂く開闢の使者。

「うわっ!!」

少年 LP 4000 3500

「さらに、効果で連続攻撃が出来る! つまり……開闢の使者とホルスでダイレクトアタック!!」

『時空突刃・開闢双破斬』!! 『ブラック・フレイム』!!!!  
「わ…わあああ!!!!」



ギャラリーが何か言ってくる前に、小走りで公園を走り去る2人……

太一の姉：花凛は有名人だ。

デュエルアカデミア大学部の2年生で将来を有望視されているデュエリストだ。

シンクロ召喚が主流と言われ、最近ではまた新しい召喚方法が出てきているらしいこの情勢で、いまだ『ホルスの黒炎竜』を使い続け、アジア大会の準優勝者にまで上り詰めた女……それが花凛だ……。

2年前の自動車事故のせいで髪が白髪になってしまったが、それを気にすることなく、元のままポニーテールにし、凛とした高潔さでデュエルに臨み、時代遅れともいわれる『ホルス』を使い続けるその姿から、言われる異名は『黒炎の姫君』……。

ちなみに今は夏休みで帰省中だから、太一と母親が住まうアパートに戻ってきていた。

とはいえ、有名人がいるということ……すぐに野次馬が集まるため、こんな朝早くにしか外に出られないのであった……。

「……僕もねえちゃんみたいになれるかな……？」

太一がポツリ……とつぶやいた。

「……まっ、努力すればなれるんじゃないの？ 今回の究極龍アルティメットティラノの召喚方法も、前よりは良かったしね。

あつ！そうだ…母さんが『アイス買ってきていい』ってお金渡してくれたから、コンビニよろつか？」  
「マジで…！やったー！！！！」

太一がコンビニにはしっていく……

「まったく…中学生に見えんな…」  
『せやな…』

ホルスが精霊の姿で花凜の傍らに降り立った。

『あれじゃあ小学生や……っ！！主人！上！！！！』  
「はあ？……って……！！！！！！」

気づいたときにはもう遅かった……

建設中のビルから鉄骨が……花凜に向かって落ちてきたのだった！！

そのあと、花凜がどうなったか、ここで書くにも値しないだろう……

……とてつもない落下音を耳にした太一が、振り返り…花凜が付い

てきてないことに気が付いて、元来た道を走り……

地面に沈んでいる鉄骨の下に、みなれた白髪を見つけるのは、これからすぐの話……

## オリ主人公について（前書き）

士郎「なんでさ！」

星矢「なんで3回目なのにまだ原作キャラが一人も出てねえんだよ  
！！」

凜「怒るな怒るな。次回からは登場させるらしいから。」

瞬「あつ…でも士郎君の出番はあるけど、星矢の出番はないみたい」  
台本を確認中

星矢「！？まじで！！？」

瞬の台本をひったくる星矢

星矢「どこだー！！俺のセリフ！！」

士郎「…落ち着けよ、星矢。

九条（作者）に頼み込めば、叶えてくれるかもしれないだろ？」

星矢「ほ…本当か！？」

士郎「（うわぁ…泣いてるよこの子…）た…たぶんな…」

星矢「よし！！行くぜ！！どこだぁー九条うう！！！」

凜「……ちょ……あーあ…星矢の奴…完全に見えなくなっちゃった。」

瞬「とりあえず時間もったいないし、馬鹿はほっておいて、オリ主設定始めるよ。」

士郎「お前：星矢の友達じゃなかったのか？」



## オリ主人公について

・神代 花凜

年齢 20 (トリップ後) 18

性別 女

身長 165cm (トリップ後) 161cm

異名 『黒炎の姫君』

容姿 凛々しい美少女で元々は黒眼に黒髪ポニーテールだったのだが、18の時の交通事故の影響によるストレスで髪の毛が白くなってしまった。だが、神をいちいち切るのはめんどいのでポニーテールのまま。

所属 デュエルアカデミア大学部本校2年生 (トリップ後)  
穂群原学園 3年

服装 遊戯王GXに登場する『早乙女レイ』みたいな感じの服装が私服。だが、赤ではなく黒色のジャケットで、スカートではなく短パンといったボーイッシュな感じ。

…体型がいいのでホルスには『もったいない…女らしい格好した方がモテる』と言われている

一人称 アタシ

デッキ 主に3種類のデッキを使っているのだが、トリップの際に持っていたのは2種類

・一軍…『ホルスの黒炎竜』と『カオスソルジャー開闢の使者』が主力のデッキ

・現在の二軍（元々は三軍）バーン（デッキ破壊）系デッキ

…本当は『ネフティスの鳳凰神』『ユベル』を主体としたデッキもあったのだが、トリップしてこなかった。

趣味

デッキをいじくること 漫画を読むこと 剣道（4段だがトリップ後の年齢の関係で3段…ちなみに実力的にはタイガー以上セイバー未満）

特技

剣道 カードの精霊と会話すること

詳細

鉄骨の下敷きになり死亡したはずなのに、目が覚めたら冬木市のアパートの一室にいた。

しかも、身体が高校生の頃の慎重に縮んでいた上、『穂群原学園』の3年に転入が決まっていた。

デュエリストとしての実力ないし異名は、この世界でも知られているが、違うところはアジア大会で『優勝』したせいで『剣術の家元である神代の名を博打打の名で汚した』という理由で、家を出されたために冬木市に来た……ということになっている。

ちなみに、それまではデュエルアカデミアではなく普通の私立高校に通っていた……ということになっている。

料理の腕前は『イタリア料理』『ギリシャ料理』なら自信があるが、めんどくさいので滅多に作らない。

実は記憶を一部喪失しているが、花凛も周囲も気が付いていない。



# 1話 神父ってなんか怪しいイメージがある

- side 士郎 -

…… 4月……

すでに桜の見ごろは終わっていたが、それは桜だけの話だ。冬の間眠っていた草木が復活する時期であり……色とりどりの花々が咲き乱れる季節であり……そして出会いの季節だ。

「……まったく……アイツも本当に懲りないよな……」

俺は弓道部の勧誘から逃げるように校舎を出た。

……俺の名前は衛宮士郎。

フツメン以上イケメン以下のルックスで、家庭料理が得意な草食系男子だ。

こつという少年の場合、一般的に運動オンチということが多いのだが……自慢ではないが、弓を持たせたら文字通り100発100中という腕を持っているせいで、『新入生が入部するついでにアンタも入りなさい!!』っと、弓道部を率いる美綴という少女の勧誘がいつにも増して激しいのだ。

「俺が入部しなくても、みんなやっていけるのに……ん？」

はあ……つとため息をつきながら坂道を下っていると、少し前の方に  
見覚えのある黒髪の少女がいた。

「おーい、遠坂!!」

少女……遠坂 凛が驚いて振り返る。俺は小走りで坂を駆け下りた。

「……士郎にしては帰りが早いんじゃないの？」

「ん?……ああ、本当は今日も柳洞の生徒会の手伝いをしようと思っ  
ただけだよ……ほら、アイツ、今日は休みだっただろ？」

「あら、そうだったかしら？」

「お前……同じクラスだろ？」

俺は呆れたように言った……が、彼女はあんまり気にしてないみたい  
だった。

俺は遠坂と並んで歩きだす。

……こうしていると、一見すると高校生のアベックに見えるかもし  
れない……が……

「本当に最近はや高でよかったわ。海外モノの宝石が手軽に手に入  
るんだから！」

「どこかの小母さんみたいだな。」

「なによ!!!この間の聖杯戦争の時に大量に宝石使っちゃって、在  
庫がなくて困ってたんだから。」

あー、いいわよねえ…『強化』しか使えない魔術師は金の心配  
しなくていいんだから。」

「『投影』も使えるって！」

「…そうよ！！それを使って贋作の高級品を作り出して売れば……」

「犯罪だぞそれ！！！」

……どうも、話している内容がアベックに見えない……

俺と遠坂は魔術師だ……が、2人の術の系統は違うものだ。

俺の使う術は『強化』…といって文字通りモノを強化させる術と、  
『投影』といって、イメージを元に、魔力で一時的に物体を作り出  
す魔術の2種類。

遠坂の方は、相手を指差すことで人を呪う北欧の魔術『ガンド』と、  
遠坂家に代々伝わる宝石を使う魔術を得意としているのだが……

先述の会話にも出てきた数か月前…この冬木市で行われた魔術師の  
戦い『聖杯戦争』で、彼女は大量の良質な宝石を使用してしまっ  
たらしい。

だから、宝石が足りなくて困っているみたいなのだ。

俺は困っている人を見捨てられない…が、宝石となると話は別だ。  
万が一『宝石を買ってやるうか？』何て言った日には…衛宮家の全  
財産が、横を歩いている『あかいあくま』に搾り取られること間違  
いなしだ。

だから、何も言わないに越したことはない。

「……もしかして、衛宮士郎君と遠坂凜ちゃん…だよね？」

いきなり誰かが話しかけてきた。

…一人の男がそこに立っていた。

神父の服を着ているが、なんとなく遊んでそうな雰囲気のある男だった。

「…遠坂の知り合い？」

「違うわよ。…えっと…オジサンは？」

「あゝ…そういや、二人は俺のこと知らねーんだっけ……」

俺は言峰教会の新しい神父って言うておこうか。」

「言峰教会！？」

見事に遠坂とはもってしまった…。

……あまりいい思い出の無い教会だが………そういえば、新しい神父が来たって聞いたことがあったっけ………？

「まつ！！立ち話もなんだし…ちょっと中に上がりなよ…『赤い悪魔』ちゃん？」

「なっ！？」

「誰が赤い悪魔ですって……！！！！！！」

あゝあ…遠坂の奴がキレた。



が、新しい神父はニコニコそれを見て楽しんでいる。……趣味悪いな……

「ほらほら、怒っていると君の可愛い顔が台無しだったの。」  
「お前って…本当に神父!？」

神父は俺の質問には答えなかった……が、ニヤリつと意地の悪そうな笑みを浮かべてこういったのだ。

「そう怖い顔しなさんなって…小さな『贗作者<sup>フェイカー</sup>』君よオ。」  
「!?!? お前…なんでそれを!?!？」

…なんで会って間もない神父が俺の能力…『投影』の事を知っているんだ!?!?

魔術師たる者、めったに手の内は明かさないのに……

……目の前の男がなんだか薄気味悪くなってきた……

「秘密秘密!!」  
さあてと、中に入りなつて。お懐かしい人が待ってるぜ。」  
「懐かしい人?」

チラリ…と遠坂の方を見た。遠坂も困惑しているみたいだった。  
……信用できない男の言葉に従って…教会の中に入ってもいいのだろうか?

もしかしたら、この教会の内部に入った途端…何かが始動する仕掛

けになつていたら……

「なんだ？『赤い悪魔』ちゃんは優等生じゃなかったのか？  
そつちの坊やや、弓使いの使い魔がいないと、一人で教会に入るこ  
ともできないのか？」

「言つてくれるじゃない！！！！  
入るわよ！！入ればいいんでしょ！！！！？」

キレた遠坂がズンズンと教会の中に入つていった。

「……ほら、お連れさんを追わなくていいのかい？」

「……それよりも、なんでお前はアーチャーの事を知つてんだよ？」

遠坂は頭に血が上つて気が付かなかったかもしれないが、この神父  
は先程『弓使いの使い魔』と言つていた。……それで思い当たる  
人物は……１人しかない。

「別に知つてたつて構わないだろ？」

ここには言峰つていったか？前神父が残した『聖杯戦争』に関する  
資料がたんと残り残つてんだからな。」

……まあ、それなら分かるかもしれない……  
が、怪しい人物だ……用心しないと……

「きゃーーーー！！！！！！」

遠坂の悲鳴が内部から聞こえてきた。

俺の体は考えるよりも先に動いていた。遠坂が入っていったヒンヤリとした教会の中に急いで駆け込む。

「遠坂あ——！！どうしたんだ！！？……って…え？」

遠坂が悲鳴を上げた理由が分かった気がした……

俺も、それを見たとき……頭の中が真白くなったから……

「……シロウ？」

冷たい教会の床に倒れている8人の人物……その中の1人…青い瞳の剣士の目の中に、俺が映ったのが確かに見えた…。

「…っ!？」

目が覚めるとアタシは見知らぬベッドの上で寝ていた。

…おかしい…確かに自分は鉄骨の下敷きになったはず…

「ん？」

ベッドの横にある小さな机の上に何か紙が置いてある…。

アタシはそれに目を通した。

「『あなた…神代花凜は死にました…が、特別措置により、高校三年生の体に戻ってトリップすることになりました!! By K…』  
…ってなんだってー!!!!?」

冗談じゃない!!どうせなら生き返らせろよ!!!

ってか、『K』ってだれだよ!? 神か!? 神ならカッコつけて『K』  
なんて書くんじゃないやねっての!!

…ってかさ…アタシは、どこの世界にトリップしたんだよ…?  
そんなくらい書いとけての!!

アタシはこれからの生活を考え…深いため息をついたのだった…。



## 1話 神父ってなんか怪しいイメージがある（後書き）

星矢「！！なんで俺たち『聖闘士星矢』関係のセリフがないんだよ！！」

士郎「えっ…だってさ、そりゃまあ…流れだから仕方ないんじゃない？」

星矢「納得いかねー！！！！」

瞬「星矢、世の中納得いかないことだらけなんだから…」

ほら、僕と兄さんなんてその典型的な例だよ。

まさか、僕と兄さんが同じ母親と父親から生まれた兄弟だなんて、誰も信じないでしょ？ってか、フツーは納得いかないよ。」

凜「自分でも認めているのね……」

## 2話 神父って妻帯しちゃ不味いんじゃない？

side 遠坂

一体どういうこと？

なんで……セイバーやアーチャーや…あの時に召喚されたサーヴァントが倒れているわけ？  
っていうか……まあ…あの時に召喚されたわけじゃないけど、あの戦争に参加していた黄金の変態もいるわけ？

「遠坂あー！ー！！……どうしたんだ！！？……って…え？」

先程の私の悲鳴を聞いたのだろう。士郎が教会の内部に駆け込んできて……目の前の状況を見て啞然としていた。

「……シロウ？」

その声を聴いて、一人のサーヴァントがうつすらと目を開けた。

……生きてる……

「セイバー！？」

「近づいちゃだめよ、士郎!!」

倒れているセイバーに近づこうとする士郎を私は制した。  
士郎は怒ったような感じで私をにらんだ。

「何すんだよ、遠坂!!」

「冷静になりなさい!!これがあの神父の作り出した幻覚かもしれないのよ!!」

「…マスター…か？」

その声を聴いた私は、士郎と同じような気持ちになった……が、そこはなんとか押さえこんだ。

「おやおや…ようやくお目覚めって事かな。」

神父がニヤニヤ薄汚い笑いを浮かべて近づいてきた。

「あんた…何をやったの？」

「いい？私はこんな幻覚に惑わされ……」

「幻覚じゃないっての。」

「えっ？」

その時の私はとても間抜け顔だったに違いない……

「だから、そこにいるのは『元・英霊』。

俺が受肉させて蘇生させたってわけ。つまり生きている第五次聖杯



戦争に参加した英雄さん達よ。」

「そ…蘇生って……本当か!？」

驚いた感じでセイバーを見る士郎。

「……はい…確かに…受肉しています。」

「間違いないのね？」

「…この感じは間違いなく生きていた時の肉体だ。」

床に倒れ込んでいたアーチャーが起き上がりながら答えた。

「でもよ、俺たちを生き返らせて何するつもりだ？」

ランサーが神父をにらむ…。

その通りだ。聖杯もない今…一体、この神父にとって何がメリットなのだろうか？

「んー…実はお前たち英雄さんの力を貸してもらいたい。」

「はあ？」

「…一緒に世界を壊そうぜ？」

そう言って神父は私達とサーヴァントたちがいる方に手を伸ばした。

「断る!…!…」

誰よりも先に反応したのは、やっぱり士郎だった。

「世界を壊す？そんなことをしたらどうなるのか分かってんのか！？」

「うんうん。分かっている分かってる！！  
でもさ……このままだと、英霊も魔術師も……ただクルクルと神の作り出した舞台の上で回っているだけだぜ？」

……ピクリ……とアーチャーが動いたのが分かった。  
……彼は『座』というものを永遠の苦しみと感じていた……だから興味が出てきたのかもしれない……

「舞台の上をただクルクル回り続けるのと……世界を壊して秩序を立て直すのと……どっちがいい？」

「秩序を立て直すだと！？お前が神になるつもりか！？」

ふざけんな！！っと言う感じで双剣『干将・莫耶』を『投影』し、神父に向かって走る士郎……だったが……

「乱暴はいけないわよ。」

漆黒の露出面の多い鎧を纏った女性が神父と士郎の間に割り込み……

「!!!?」

素手で士郎の剣を受け止めたのだ。

「パーティータちゃん！勝手に出てきちゃダメだろ？」

「ごめんなさい。でも…このままだと、この少年を殺す羽目になつてたでしょ？」

とっても笑顔が素敵な女性なのに……話している内容が……

つか……あの二人、どういう関係なの!?

夫婦っぽいオーラ出してるけど、神父って妻帯禁止よね？

「つく……!!」

後ろにはね飛んで、私達のいる位置まで戻ってきた士郎。

「大丈夫ですか、シロウ!!」

セイバーが士郎に駆け寄っていった。…士郎は肩で息をしている…

「はあ…はあ…お前…人間か？」

「ふふふ…人間よ…今はね。」

「今は…ってことは…昔は違ってたって事？」

私が問いただすとパルティータは笑って答えなかった。

「…世界を壊すといつても、殺す人間は20人もいないわ。それに…殺したところで一般人には迷惑がかからないし…」

パルティータが優しく言った。

「…見た限りだと、貴方も相当な腕を持っているように思えますが……  
何故、私達の力を借りたいと思ったのですか？」

セイバーが見えない剣を構えながら問いただした。

「それは……」

「ツマンねえだろ？役者が少ないと。」

パルティータが言おうとしていた言葉を神父が遮った。

「役者！？」

「そう！俺もお前たち敵さんもみんな役者。」

まあ…お前たちは断れねえぜ？断ったら……お前たちも『敵』ってみなして昼間っから襲ってやるぜ？」

緊張感とその場の全員を包み込んだ。

「冗談じゃない！！魔術師の戦いは人に見られたら……」  
「その人を殺す……だろ？」

つま、結論は焦らなくてもいいさ。次の満月の日……一週間以内に決めてくれたらいいんだからな。」

パーティータとは反対に、意地の悪い笑みを神父は浮かべていた……

side 花凜

「まったく……これじゃあ原作介入は難しいじゃん……」

アタシは近所のスーパーに向かいながら考え事をしていた。

部屋に置いてあった学生証には『穂群原学園3年』って書いてあった……から、ここはおそらくFate/stay nightの世界……でも、3年生だから……原作メンバーとは別のクラス確定なんだよな……

……まあ、『聖杯戦争』は冬だし……漫画やゲームを思い出しながら魔術の練習でもなんでもして、おくか……強化くらいなら見よう見まねで出来るかもしれないし……

『でも、サーヴァントはどうするんや?』

精霊化しているホルスが尋ねてきた。

……こっちにトリップしてきたときに、アタシ自身のデッキまでトリップしてきていた。

これは特典か何かなのだろうか?

「……心よむなつて……」

そうね……言峰と契約でも交わして……バゼットから奪ったランサーを貰う……とか?」

『悪質やな……主人……』

それより、受験はどうするんや?』

「一応……受験勉強の知識はあるからね……奨学金で行くか……それとも推薦で合格しておいて、デュエルで稼いだ賞金で通うか……ん?」

駅前の新聞売り場で見覚えのある言葉を見つけて、アタシは思わず立ち止まった。

「ちょ……これって……」

『……えっ……でも……こっつて冬木市で……Fateの世界やろ!?!』

「……なんだけど……なにこれ?」

その新聞の一面には……こう記されてあったのだ……

『グランド財団総帥：城戸沙織嬢 行方不明！！？』

…と…

## 2話 神父って妻帯しちゃ不味いんじゃない？（後書き）

星矢「だから沙織さん…今までこのオマケコーナーに登場してなかったんだ!!」

瞬「いたら絶対に登場するキャラだもんね。  
誰かに負けず劣らない目立ちたがりだし。」

星矢「それって誰のことだよ？」

士郎「そ…そうだ！それより、パーティータって誰だ!？」

（話題を変えようとする士郎）

星矢「んゝ知らね。LCのキャラだろ？  
ってかさ、テメーは本編に出てるんだからでなくていいだろ？」

士郎「…結局、そこに持っていくのか……」

セイバー「…それよりシロウ。早く帰りませんか？  
お腹がすきました。」



星矢「！？それよりってなんだよ！！あのな……」

ランサー「んじゃあ、俺の分まで頼むぞ。  
行く当てがなくて困ってんだ。」

凛「そういえば、確かにね……」

士郎「いいよ。」

ランサー「マジで！？ありがとな！！」

ギルガメツシュ「……なら余も……」

セイバー「あなたはダメです。」（キツパリ）

ギル「……ふっ……余のセイバーはツンデレだな。  
気にしなくてもよいぞ。」

セイバー「……（怒）……！！」

瞬「ほ……ほら、押さえて、セイバーさん！！」

セイバー「……つく……」

ギル「では、余はセイバーの作った料理を頼もう。  
ありがたく思え。」

セイバー「……イライライライラ……」

アーチャー「……数分後にはギルガメッシュの三枚おろしが出来上が  
っているだろうな……」

ランサー「……同情はしねえよ。」

### 3話 卵って割れたら後処理がめんどくさい

- side 紫龍 -

「…紫龍？氷河さんが来ているわよ？」

春麗が腕立て中の俺に声をかけてきたようだ……なるほど…確かにこの小宇宙<sup>コスモ</sup>は氷河のものだな。

「…分かった。」

腕立てを止めて立ち上がる。

「久しぶりだな、紫龍。」

「…お前こそ元気そうだな、氷河。」

眼が見えない俺だが、小宇宙のお蔭で異母兄弟…氷河がそこに立ってこちらを見ていることが分かった。

「…それにしても、珍しいな…お前がここにやって来るなんて。」

……ここは日本・冬木市……

グランド財団が援助をしている高校…穂群原学園に入学したため、紫龍と春麗は2人でアパートの一室に住んでいるのだ。……よく老師が泊まりに来て、今日も来る予定だが…まだ彼は姿を見せていな

い。

「実は…老師のことなんだが…今日は来ることが出来ないようなのだ。」

「ええ！？老師に何かあったんですか！？」

俺たちにお茶を出す春麗が驚いた声を上げた。

「大丈夫だ。彼はピンピンしている。」

「……よかった…てつきり老衰かと……」

ほつと胸を下ろす春麗……一応、老師は現在…20歳の肉体を取り戻しているが……歳は200を超えているので、いつ逝ってもおかしくない歳だ。心配しない方がおかしい。

「では…いつたい？」

「今日の夕刊を読んだか？」

「いや。…まだ来てない。」

「そうか……持ってきて正解だな。」

バサリ…と氷河が持ってきた新聞を広げた。

「嘘だろ…！？」「沙織ちゃんが！？」

…そこには『グランド財団総帥・城戸沙織嬢失踪！？』と書かれ

てあつた。

「ああ… 本当の話だ。

ココには書いていないが…… 昨夜の警護についていた一角獣座ユニコーンの邪武と…… あれはだれだったか…… あああれだ。子獅子座の蛮だ。あの2人が何者かに一瞬でやられ、お嬢様は連れて行かれた。

だから発覚してから教皇サガが中心となって黄金聖闘士総出で調査に当たっている。」

「…… 手掛かりはあるのか？」

「あるにはある……」

邪武がいうにはお嬢様を連れ去った人物は男だということ…… その男が『後、必要なのは黒炎の姫ちゃんだけ』と言っていたそうだ。

「

「黒炎の姫？」

…… だれだそれは？ まったく心当たりがない。

「俺もよく知らないのだが…… ヤコフが言うには、M & a m p ; W というカードゲームのアジア王者の異名だとか……」

…… ちなみにヤコフっていうのはシベリアで氷河の従者として暮らしている少年のことだ。

「…… それで、その姫とやらが、お前の学校に明日から転入してくるらしい。」

「…… ! …… っということとは、その女を見張れ…… ということか？」

氷河が笑ったような気がした。懐から何やら封筒を取り出す氷河…

「主人公来たああー！！！」

……なんか表通りから叫び声が聞こえたが……気にしないことにしよう。

氷河もチラリ…と窓の方を見たが、すぐに俺に視線を戻した。

「さすが呑み込みが早いな。…こういう任務は一輝よりお前の方が向いているだろう…っというサガからの命だ。…これが勅命だ。一応…万が一のため、この町に老師とは別に、黄金聖闘士が1人…派遣されることになっている。まだ誰になるかは未定だがな。」

「紫龍……」

心配そうな顔をして春麗が俺の顔を見てくる……俺は春麗の頭に手を置いた。

「大丈夫だ。ただ見張るだけだからな。……その任務、受けよう。」

俺は封筒に手を伸ばした。

「…………これって本当に沙織アテナだよな…………」

何度見たって変わらない新聞の写真……………どういうことだ？ Fate / stay night の世界に来たんじゃないのか！？なのになんで…沙織嬢？聖闘士星矢の世界観はいつてるわけ！？

『つまり、Fateと星矢が混ざった世界なんとちゃうか？』  
「それしか考えられないよな…………」

まったく…なんだよ一体…でも待てよ…フツーに考えて、フツーに生活してたら『聖闘士星矢』に介入することはないよな…………

『なんや？介入したくないんかい？』

「当たり前！！あんな死亡フラグわんさかの世界に入り込んだ暁には…………」

まだFateの方がフラグ少ないわ！！そもそも小宇宙使えないし！！…つか、小宇宙に比べたら魔術のほうが楽そうだし！！」

『…………でも…主人は頑張れば小宇宙使えるかもしれんで？』

「無理だつて。」

あれをするためには、腹筋何回やってた？100単位じゃなかっただろ？

それをごくフツーの一般人にやれと？」

『いや…オイラと話してる時点でフツーとはいわへんで…』

そのホルスのツツコミは無視することにした。

「……ったく…なんでさ。  
セイバーは分かるけど、なんで遠坂やアーチャー…それにランサー  
やライダーまで増えてるんだよ…」

…ん？なんか今……聞いたことのあるような声が……

「なあ、ホルス？今のつて…！？」

ズガッ！！ドカッ！！

「痛っ！！」

「……わ…悪い……」

角を曲がった時に、誰かとぶつかってしまった。デコが痛い……

「……こちらこそ……って……」

そこにいたのは…今のアタシと同じくらいの年齢の、赤髪の少年……

「主人公来たああー！！！」

「！？」

思わず叫んでしまった。向こうは驚いてるけどさ……でも、こっち



だつて驚いたんだから。

これ……ってどつからどう見ても衛宮士郎じゃん！！あの女ったらしじゃん！！

……あつ……でも、たらしっていうなら、上条当麻とか一夏の方がたらしか……？

……ともあれ、初めての原作キャラとの遭遇か……

「ご……ごめんなさい。取り乱しちゃって……」

「い……いえ。大丈夫……って……ああ！！卵が……！！」

見ると、スーパーのレジ袋から黄色い汁が………ってか、パンパンなレジ袋をなんで5つも持つてるの？

「……えつと……ご家族が多い……んですか？」

一応、初対面なので慣れぬ敬語を使ってみた。  
すると士郎は曖昧な笑みを浮かべた。

「家族って言うか……大食漢の居候が沢山いて……あはハハハって笑うしかないですよ。」

うん……遠い目をしてるよ………ん？待てよ………この時期に何でそんな居候が？

………考えるのは後だ。とりあえずは………

「卵…差し上げますよ？」

アタシのレジ袋に入っていた卵のパックを土郎のレジ袋に入れた。

「そ…そんな…！悪いですよ！」

「はあ？だってアタシがぶつかって割れたんだから…弁償しないと気が済まないってもんよ。」

それに…マジで食費が大変そうだしな。

ん？この後どうなったかって？

フツーにお礼言われて別れたよ？だって……赤の他人だしね。

### 3話 卵って割れたら後処理がめんどくさい（後書き）

カミュ「おっ！！今回は我が弟子が登場したな！」

ミロ「…なにやってんだ？」

カミュ「決まっておろう！！氷河の勇士をHDからDVDにダビングしているのだ！！」

セイバー「……ですが、氷河は勇士と言えるほどの活躍をしてなかったように思われますが…？」

カミュ「いや！！氷河は何をしても勇士と言えるのだ！！……マーマに関してはクールでいられないが、他の面では師をも超えているのだ！！」

氷河「わが師！！何をおっしゃっているのです！！私はまだ…わが師に学ぶことが山ほどあります！！」

カミュ「…立派になつたな氷河。」

氷河「いえ。まだ足元にも及びません。」

.....

凜「...なんつか...暑苦しいわね...」

ライダー「...かれこれ20分はああしているわね...」

アーチャー「病的だな。」

ミロ「すまん...ああいう奴なんだ。」

士郎「?そういえば星矢は?」

アーチャー「ああ...彼なら向こうの隅で負のオーラを放っているぞ。」

星矢「...なんで俺の出番がないんだ......なんで紫龍と氷河が?...春麗より後に出る主人公ってなんだよ...ブツブツ...」

士郎「…そっとしておいてやるか…」

#### 4話 突撃！隣の晩御飯！？

- side 花凜 -

「……たく……転入生1人に騒ぎすぎだ……」

はあ……つとため息つきたくなるよ。

「彼氏いるの？」とか「好きな人はどんなタイプ？」とか「じゃあ、カードで例えるとどんなタイプが好み？」……とかどうでもいいこと聞いてきやがって……

にしても……まさか衛宮士郎や遠坂凜と同じクラスだったとは……

もう3年生になってるってことは、聖杯戦争は終了しているってこと……

でも、サーヴァントがいるみたいだし……あれか？同じ4日間が繰り返される……って話？

……でも、アレだと、凜はロンドンに行ってるんだよね？

「……サッパリわかんねえ……ん？どうした、カオスソルジャー？」

カオスソルジャー開闢の使者が、いつの間にか隣に立っていた。

『…主人…気が付いていたか？つけられてたぞ。』

『…マジで？』

『今は『混沌の黒魔術師』が『人避け』の術を使っている…だから屋上は安全だ。』

そういうと、微かにカオスソルジャーは微笑んだ。アタシも微笑み返す。

「サンキュー…で、誰だよ？」

アタシだってフツーなら、つけてる奴がいたら気づくの…」

『まだわからん…』

『へっ！！情けないんやな！！まだわからへんの！？』

ホルスが嘲るように声を上げた。

「なら、アンタには分かるの？」

『今から調査や！！見ておれ…開闢の使者！！』

俺の方が主人のデッキで一番の相方になるカードや！！』

「…無理すんなよー」

猛スピードで消えていったホルス…まったく…本当にカオスソルジャーと絡むと暑くなりやすいな…

「…まっ！とりあえず…もうすぐ授業だから…戻るか。」

『気をつけるよ…主人』

分かってる！！って言う感じで手を振りながら、屋上を去るアタシ

……

にしても……つけられてるか……嫌な感じだな。

だから……今日は早く帰ろうって思ってたのに……

「神代さんはご飯普通盛り？」

「なにかアレルギーとかありますか？」

「………なんでこうなる？」

思わずそうつぶやいてしまった……

何で早く帰ろうとしたのに、士郎の家で夕飯を食うことになったんだ？

……しかも、士郎自身に許可はとってあるのか……？

明らかにこの家にいまいるのは、タイガー……ことアタシの担任でもあり士郎の姉的存在の藤村先生と、士郎の弓道部の後輩である間桐桜……とそのサーヴァント……ライダー。

それからアインツベルン城に住む少女イリヤ……と、家の外の庭でおとなしくしているのは彼女のサーヴァント……バーサーカーだ。

……えっと……あそこで桜と料理してんのは凜か……ん？よく見たら



凜のサーヴァントのアーチャーまで手伝ってんじゃない？

どうなってたんだ……？

「ただいま。」「あゝ疲れたぜ。」「おながが減りました」

ん？…たぶん士郎が帰ってきたんだな………つか…気のせいかな？  
セイバーは分かるよ？士郎のサーヴァントだもんな。  
でもさ……なんでランサーの声まで聞こえたんだ？

……一体…どんな設定だよ………？

……で、アタシを見た士郎の第一声が……

「…なんでさ？」

…うん。分かるよ、その気持ち。

side 士郎 -

「…なんでさ？」

俺は、いつもの口癖をつぶやいてしまった。

…今日は、学校から帰るとすぐに、セイバーとランサーと一緒に、主に食材の買い物に出かけた。

実は今、衛宮家は食糧難を迎えようとしていた…。

まず、夕飯を食べに来るのは、いつもの藤ねえと桜……と桜についてきているライダー。

あと…たまにイリヤも食べに来ている。

ちなみに、ついこの間までは藤ねえのところにいたイリヤだが、今はバーサーカーも戻ってきたので、元の城に戻り生活をしている。

で、そのほかに、『今後の作戦を立て易くするために』とかで凜と彼女のサーヴァント…アーチャーが居候している。

…あと、『行く当てがない』ランサーを引き取るはめになってしまっていた。

ん？ギルガメッシュはって？……うん……彼を俺の家に入れるのを断固反対した奴がいて……

彼は今、結局……うちのセイバーが戦闘不能にした後、海に重りをつけて沈めていた。

……どうなったかは考えないでおこう……

で、俺のサーヴァントのセイバー……つまり4人も居候がいるのだ。

…おかげで家計は火の車になりそうだ…

この上、キャスターとアサシンまで来なくてよかったよ…キャスターは葛木先生の奥さんって位置に収まっているし、アサシンは門番として柳洞寺にいるからな。

「あゝあ…なんで俺が買い物の手伝いなんだよ。」

ブツブツ言うランサー…だが…

「おい坊主、こっちの方が得なんじゃねエか?」「こっちの方が新鮮だぞ」

みたいに手伝ってくれるからいい…

「シロウ!これを食べてみたいです!」「これは一体どんな味がするのですか?」

つと言って、買い物の量を増やすセイバーよりずっといい。

で…帰宅したら…

「なんでさ…?」

…なんで見慣れない人が混ざってるんだ?長い白髪が特徴的で…穂群原学園の制服を着た少女…

「…ってああ!…た…確か…転入生の神代!?」

「…ああ…すまん…邪魔しているぞ…たしか…衛宮だっけ?」

「よく覚えてたな… ってか、昨日は卵、ありがとな。  
まさか、あの時は転入生だとは思わなかったよ。」

そつ… 昨日、こいつから卵を恵んでもらったんだよな。  
… って… それよりも…

「なんで神代がここに？」

「……この人に拉致られた。」

「ひどいじゃない、神代さん!!」

藤ねえが怒った感じで言った。

「土郎、あのね… 神代さんは1人暮らしだから、これから時々、一緒に食べることにしたから。」

「……すまん… アタシも悪いとは思ってたんだがな。」

ってか、衛宮にすべてかかっているんだ。アタシ的にはもう帰りたい…  
…こんなハーレムの空間から。」

「…いや… どこがハーレム？」

「とぼけるな。織斑一夏ほどではないけど、これはハーレムだろ？  
男の率と女の率の割合がおかしいだろ!!」

「織斑一夏？ 誰だよそれ…？」

「そこは気にするな。」

俺は少し考えた……このままいくとマジで経済面が危ない衛宮家…  
でも……

「一人暮らしなら… 仕方ないか…」

「ほら、神代さん！！土郎もいって言ってるんだから、もう少しリラックスしなさい！！」

つと云ってポンポンつと神代の背中を叩く藤ねえ…

「はいはい！出来たわよ！！」

遠坂がデンつと料理を持ってきた。

「ゲツ…中華かよ……」

少し嫌そうな顔をするランサー………そういえば、言峰の所では毎日が麻婆豆腐で、中華には飽きたって言ってたっけ……

「文句があるなら、お前の分を全てセイバーに回すが……」

「ってめー！何言ってやがるんだアーチャー！！」

………って！！…ってなに俺の分を勝手に食べてんだー！！！！」

セイバーが黙々とランサーの分まで食べていた。…なんか哀れだな…  
セイバーはキョトンとした顔をしてランサーを見た。

「…いいのではないですか？」

「よくねえー！！！」

「…なら、アタシの分を半分食べるか？」

…見るに見かねたのであろう神代が、自分の分の半分を取り皿にとつて、ランサーに渡した。

「嬢ちゃん…お前…いい奴だな!!」

「つてかさ、衛宮…この兄ちゃんやお姉さんたちってどんな関係なわけ？」

出来れば、さつきから庭からこつち睨んでる…あのデカブツの正体も教えて欲しいんだけど…」

「あれはバーサーカだよ!!イリヤのサーヴァント!!」

俺が答える前に、イリヤが口を開いた。

「サーヴァント？」

「えっと!!つまり……イリヤの召使ってことだ!!」

魔術師ではない神代に『サーヴァント』なんて説明しても理解してくれないはずだ。

「えっと…この人たちは、俺の義父の知り合いで、居候中なんだ。あとは…凜の知り合いに桜の知り合いってことかな？」

右からセイバー・アーチャー・ライダー・ランサーだ。」

「…偽名かよ？」

……まあ、名前っぽくないからな……

「いや、それでも、この人たちの本名なんだよ!!」

だつてさ、言えるわけないだろ!!  
アーサー王だの、クー・フリーンだの……本名言っても絶対に信じ  
てくれないよ!!

「……ふん…面白いね。」

セイバーだから、その人の手には剣ダコがあるんだ。ん?でもさ、  
なんでアーチャーって人にも剣ダコがあるわけ?  
弓使いなら、剣なんていらないだろ?」

「ほう…よく気が付いたな。」

アーチャーが少し驚いたような顔をしている。  
一瞬で自分がよく使う武器を見抜かれてしまっていたのだから、無  
理もないかもな。

「そっぴゃ、嬢ちゃんにも剣ダコあるじゃねえか!」

神代の手を見たランサーが言った。

「…まあ…少しやってたことがあつて…」

「へえー!!面白くない!!」

じゃあ、後で私と勝負しない?」

藤ねえが身を乗り出した……が…

「待ってください、藤村先生!!」

遠坂がストップをかけた。

「その勝負…先生相手だと神代さんも本気を出しにくいと思うので…どうですか？」

この後、セイバーと神代さんが戦ったら？」

「ちょ…遠坂！？何を…」

「…負けた方が一週間皿洗いっていうのはどう？」

罰ゲーム付きかよ…って…ん？

そつえば…これから一週間は遠坂が、皿洗いの当番だったんじゃ

……

「…そうか…こいつ…これを出汁にして、神代に皿洗いを押し付けるつもりだな。」

「ですが…私に勝てるわけが…」

「んじゃあ、やってみるか。」

あっさり引き受けた神代。

「何事もやってみないと分からないしな。」

…うわぁ…目が本気だよこいつ……まあ、セイバーは見た目からし



て弱そうだからな。

「仕方ありませんね……」

ため息をつくセイバーだった。

……何はともあれ、一週間の皿洗いは神代に決定したな……と俺は思った。

## 5話 竹刀って意外と高いのにすぐ折れる

side 花凜 -

目の前にセイバー（アーサー王）が現れた。

戦って死ぬ

降参して恥をかく

……どっちも嫌だ！！！！

ってかさ、なんかノリで試合申し込んだけど、これムリだろ！！

藤ねえみたいに反則技使ったって勝ち目ないっての！！

だって…目の前で竹刀を構えている可憐な少女…は何を隠そうアーサー王だよ！？英雄中の英雄だよ！！

……無理だ…勝てそうにない……でも…負けたくないって思うんだよな…

アタシは深呼吸をして竹刀を構えなおした。

「…遠坂…お前…意地悪いぞ」

「でも、承諾したのは、あの子よ。」

これで私が一週間皿洗いしなくて済むわ!!!」

「…嬢ちゃんはや地が悪いなあ。」

「そう思うかランサー？マスターの意地が悪いのはともかく、相手の力量を見極められない小娘のせいともいえると思うぞ。」

……外野…うるさいなあ…ってかさ、あの「赤い悪魔」め…そんな魂胆があったとはな……

皿洗いは嫌だ。めんどくさい……っとなったら……

「勝ちに行くしかないってか…」

「…言っておきますけど、貴方では私に勝てません。」

んなこと百も承知だったの!!!

「そうか…でもさ…そうならないかもしれないぜ!!!」

床を蹴り一気にセイバーとの距離を縮めた。

…面みたいに派手な勝ち方は狙わないで……胴か小手を狙えば……

スカッ

「えっ？」

……まさか…避けられた？自信あつたんですけど……

「…ま…まだまだ！！！」

スカッスカッスカッ

…イライラするくらい避けられる…何？今のアタシって藤ねえ状態？

「勝負あつたわね…」

ライダーらしき女性のつぶやく声が聞こえた気がした。

アタシにだってわかるさ………これだけ避けられてるってことは、見切られてるってことくらい………でもさ………

「なんか負けたくねえってんだよ！！！」

誰かにつけられている…って気が付いたから即席で作ったチヨーク煙幕を2つ床に投げた。

とたんに、白い煙があたりを覆い隠した。

「ゲホッゲホッ！！これは…煙幕！？」

「違う…これはチヨークよ！！」

「……藤ねえと同じ発想だ……」

外野の声なんて気にするか！！

確かに藤ねえと同じ戦法だが…アタシはあんな派手にいかないさ。

身をかめて足元を…狙う！！

「はぁあっ！！！！」

スパンツ！！！！

あれ？また手ごたえがない！？

「惜しいですね。ですが…あなたの負けですよ。」

上空から声が聞こえた。見ると…セイバーは弧を描くように宙を飛んでいた。

…たぶん…攻撃が来る直前にジャンプしたのだろう。

「甘いよ！！」

空中には足場がないから態勢の立て直しは不可能！

アタシは落下地点目がけて走った……が……

スパアアン！！

あれ？なんでアタシが宙を舞ってるんだ…？

「くはぁっ！！」

ドサツッと床にたたきつけらる…が…痛みはそこまでなかった。

…おそらく、アタシが振り上げた竹刀とセイバーの竹刀が当たって…  
…力負けしたアタシが飛ばされたのだろう。

「つく…まだまだ…」

少しふらついたがアタシは立ち上がって、竹刀の先を無表情なセイバーに向けた。  
すると、微かにセイバーの顔つきが変わった。

「…まだまだ？あなたはもう分かっているはずですよ。  
私には勝てないと。」

「で…でもお…」

うるうる…と涙目になってしゃがみこむアタシ……

さすがに、やりすぎた…と思ったのか、セイバーが戸惑いながら近づいてくる……

そしてセイバーの手がアタシに触れる刹那……！！

「!？」

「泣くもんか!!アタシが!!」

セイバーの竹刀を奪い手の届かない位置まで放り投げると、右手で自分の竹刀を振り上げ…そして…

パシィ

……やっぱり……真剣白刃取りされました。

「ここまで多少の反則は目をつぶってきましたが…さすがに今のはイラッと来ました。」

う…うわぁ……ものすごいパァ…っという効果音が付きそうな笑顔

……  
やばい……不味いかも……

「貴方には騎士道というものを骨の髄までしみこませてあげましよう。」

……怖い……

正直にそう思った……彼女からは”殺気”がにじみ出ていた。

一步後ろに下がろうと思ったけど、後ろは壁……少しずつ近づいてくるセイバーが怖い。

このままだと……殺される!!!

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない

……!!!!!!

アタシは……

「負けたくない!!!!!!」

振り下ろされたセイバーの竹刀がやけに遅く見えた。

アタシは何も考えず……ただ「勝ちたい」一心で自分の竹刀で攻めに行った。

バシィィィン!!!!!!

「……え？」



何が起こったのか自分でもよく分からなかった。

ただ…セイバーの表情が一瞬、ポカンとしたかと思うと、即座にアタシから離れるように後方へ跳ね飛んだ。

なんか…表情が別の意味で怖い…あと、周囲の視線が痛い……

「貴様…今の力はなんですか？」

「へっ？今の力って……！！！！？」

その時、アタシは気が付いた。……セイバーの持っている竹刀の半分より上がボッキリ折れてなくなっているってことに……

それから……自分の内側から感じる燃え上がる種火のような何かに

……

「あ…あはははは……って笑うしかないや……」

力が抜けて座り込んでしまった……。

分かるさ…なんとなくだけど、なにをしたか…何に目覚めたか……こりゃ…死亡フラグが立ったかもな……あははって笑うしかないよ……！！

「いいから答える……！！」

怖い顔したセイバーが問い詰めてくる。

アタシは自身の額に手を置いて下を向いた。

「……たぶん……こりゃあ第六感……小宇宙コスモに目覚めたんだな……  
あははは……死にたくないのに……」

……本当は魔術の方に目覚めたかったのに、なんで小宇宙コスモに目覚めたんだよ……！

聖闘士にはなりたくない……魔術師の方が憧れるのに……

アタシはもう、笑うことしかできなかった……。

## 5話 竹刀って意外と高いのにすぐ折れる（後書き）

星矢「なんでさー!!」

士郎「え……？それって俺の口癖なんだけど……」

星矢「なんでまたF a t eネタなんだよー!!」

桜「ほんの少し聖闘士星矢の小宇宙という単語が出てきましたけど……」

星矢「納得いかねー!!」

紫龍「諦めろ、星矢。

今の舞台は冬木市だ。必然的に聖闘士星矢のキャラが少なくなるのが分らないか？

……それに、次回からは聖闘士ネタも増えると思うぞ?」

星矢「そ……そうかな!？」

凜（単純ね……）

瞬「…星矢は出てくれるか分らないのに……」

コレの話の中心となる聖闘士は題名通り黄金聖闘士なんだから……」

沙織「では、もう少し星矢の出番を増やすよう……または題名を『Gold』から『BRONZ』に変更するように直談判してきますわ。」

「

一軍青铜一同「沙織さん!?!」

士郎「えっ?…ニユースでは行方不明って……」

沙織「だって…暇なんですもの……出番なくて。」

瞬「…沙織さんらしいや……」

## 6話 勘違いから大惨事になることってよくある

side 士郎 -

「ってことで、アタシはもう帰るよ。」

遠い目をして『コスモ』について語ってくれた神代はそういうと、よろよと立ち上がった。

神代が言うには『コスモ』というものは以前テレビでやっていた『ギラクシアン・ウォーズ 銀河戦争』で星矢たちが使っていた技の源…だそうだと、それがなんか目覚めてしまったと……

なんか神代って凄い奴かもしれない……

「えっ…もう帰っちゃうの!？」

貴女とはM & a m p ; Wについて話し合いたかったのに!…!」

イリヤが抗議の声を上げる。

……… すごいえばこいつ… M & a m p ; W 大好きだったけ？

神代はイリヤの頭をポンポンと叩いた。

「ごめんな、なんか疲れたからさあ…。」

それに、なんか嫌な予感するし……… また今度な。」

「いやな予感？」

俺が疑問符を浮かべると、神代は困ったような顔をした。

「えっと…その…あれだ。」

アタシの髪って夜道じゃ目立つだろ？だから何かと絡んでくる奴が多いんだ。

もつとも、そいつら全員ブツ倒してきたけど…なんか今日は嫌な予感がすんだよ……。」

……確かに神代の髪は白い…夜道じゃ目立つだろう……

ってこれは同じ白髪を持つイリヤやアーチャーにも言えると思うが、イリヤにはバーサーカーという最凶のサーヴァントが付いているし、アーチャーは男だ。アーチャーを襲う人間なんて想像もつかない。

だが、神代は弱そうに見えるし1人だ。……さっきのコスモっていう力を使えるから怖いものなしにも見えるが……見るからに疲労感が出ているので、使いこなせるかどうか危ういだろう……

「んじゃあ、俺が家まで送っていくよ。」

「なっ！？士郎！？」

遠坂が驚いて声を上げた。

「だってさ…疲れてるみたいだし……」

「まあ…確かに最近は物騒だし…ね。」

藤村先生を襲う人がいるとは考えにくいし、イリヤにはバーサーカ

ー…桜にはライダーが付いてるけど、神代さんは1人だからね……」

「ちょ……アタシは1人で帰れ……」

「士郎や遠坂さんの言う通りよ……!」

藤ねえが神代の肩をつかんだ。

「だって神代さんは疲れている上に、この町のことをよく知らないでしょ!？」

いいから士郎に送ってもらいなさい。」

「……分かりました。」

ため息をはく神代…

「……じゃあ、途中まで頼むよ、衛宮。」

……なんか……そんなに一人で帰りたいのかな?つてくらい嫌そう  
な感じの顔を向けられた。

s i d e 紫龍

……『黒炎の姫』…神代 花凜は、1人の少年と一緒に屋敷から出

てきた。

……あの少女は何か変わっている……

あの家の中で、習得には何年も厳しいとしか言い表せない修行を積まないといけない小宇宙コスモに目覚めたのも変わっていると思うが……

それよりも、彼女からは、まだ小さいながらも2種類の小宇宙を感じるので。

1つは荒々しい小宇宙……もう1つはそれとは対極の、すべてを包み込むような小宇宙……

2種類の小宇宙を持つなんて……サガみたいに二重人格なら分かるが、そうでもないみたいだ。  
一体彼女は…何者なんだ？

「!？」

公園の辺りに差し掛かった時、突然、殺気を感じた…と思ったら、何か刃物のようなものが俺に襲い掛かってきた。

俺がそれを避けると、攻撃してきた相手は感心したような声を上げた。

「ほう…なかなかやるな…」

「お前はだれだ!？」



「お前がストーカーをしてる少女の守護者…とでも言っておこう。」

青い騎士はそういうと、剣を俺に向けてきた。

……なんでこんな時代錯誤の騎士が街中に！？……っと突っ込みたくなつたが、ツッコむ前に乱入者が現れた。

「コラアアア！！！！オイラが花凛の守護者や！！！！  
お前は黙ってればいいんやんけ！！！！開闢！！！！」

物凄い勢いで白銀の巨鳥が割り込んできた。

……物凄い怒りのオーラを感じる……

「ふっ…ホルスよ…頭が悪いのではないか？

お前は守護者ではなく守護鳥なのではないか？」

「ええんやんけ！！守護者でも守護鳥でも主人を護る一番の相方は  
オイラや！！！！

『ブラックメガフレイム』！！！！！！」

そついうと鳥は俺に向かって黒炎を放ってきた。

「廬山百龍覇！！！！！！」

黒い炎を、俺の放った無数の龍をかたどった闘気で相殺させた。

ズトオオン！！！！

物凄い爆音があたりに響き渡る。軽く青い騎士が舌打ちをしていた。

「…不味いぞ…このままだと人が集まってくる……  
やりすぎだ…ホルス。」

「うるさいんや！！！！このストーカーには嫌というほど……  
ん？つてか、なんでストーカーがオイラの炎を消すくらいの拳を持  
ってるや？」

ホルスの眼が…怒りに染まった眼から、獲物を狩るときのような目  
に変わった。

「……分かったで……  
お前…主人を狙ってるんやろ？」

……どうやら完全に誤解されているらしい……

「待て…俺は…」  
「問答無用！！『ブラックメガフレーム』！！！！！！」

ホルスが黒炎を再度放った。

……仕方ない…倒すしか方法がなさそうだ。俺は小宇宙を高めた。

ズトオオン！！！！

「よっしゃあ！！」

「…果たしてそううまくいくな？」  
「！？」

俺を灰にしたと思い込んでいたホルスはあっけにとられていた。

「廬山昇竜覇！！！！」

廬山の大滝をも逆流させる拳をホルスに向けて放った。

「グフアアア！！」

ホルスの口から鮮血がしたたり落ちたのを見た。

そして…力尽きたのか、バタリ…とホルスは、そのまま地に崩れ落ちてしまった。

それを少し離れたところから見ている青い騎士…。騎士は一度しまった剣を再び抜く。

「…我が同朋をここまでするとはな……たかが人間が。後悔するがよい……！」

静かな闘気と殺気をにじませている……これは見境もなしに突っ込んできたホルスより厄介な相手になりそうだ……

「…仕方ない…来い！龍星座ドラゴンの聖衣……！」

「何を呼ぼうにも…俺の剣からは逃れられんぞ……！」

青い騎士が剣を振り下ろした刹那……！！

カキーン……！！

「…久々に使うことになったな…このドラゴンの盾を……」

間一髪間にあつたようだ。

自分でもほとんど意識しない間に、濃緑色の聖衣……龍星座ドラゴンの聖衣が俺を纏い、聖衣の中でも

最高の硬度を誇る盾が、青い騎士の剣を防いでいた……が、毎度のことながら、すでに傷がついていた。

「…俺の剣を防ぐとは……な。」

青い騎士は少し汗をかいていた。

「…つく（実体化している時間が長すぎたのか…思った以上に疲労が激しい…!!）」

「…時間がない…これでケリをつける!!」

剣に全身全霊の力を込めている青い騎士…：…なら、こちらで戦士として、それに答えなくてはな…  
俺も最大限の小宇宙を高めていった。

「いくぞ!!俺の奥義!『時空突破・開闢双破斬』!!!」  
「受けてみる!全てのモノを切り裂く聖剣…『<sup>エクスカリバー</sup>聖剣』!!!」

青い騎士の剣から放たれた斬撃と、俺の左手から放たれた斬撃とがぶつかり合った!!

ドシャアアン!!!

斬撃同士のぶつかり合いで勝ったのは俺の政権だったらしい。  
青い騎士は聖剣の斬撃に耐えられず、剣が折れ…自身は大木にたたきつけられた。

「くはあ!!」

「…か…開闢!？」

口から赤い色の液体を出した騎士は、動かなくなった。

ホルスの口から弱弱しいが…仲間を心配するような声が漏れた。

……が、騎士が反応しないのを見ると、ホルスの目に再度…光が灯った。

「…まだやるのか？」

ホルスは満身創痍だったが、それでもなんとか起き上がって、俺を睨みつけてきた。

「…はあ…はあ…もう…オイラしかないんや……」

主人は…花凜の所には行かせてたまるかつちゅうんや!!」

「……だが…お前の主人を見張ることが俺の任務なのでな。

悪いがいかせてもらう。お前では俺の相手にはならん……!？」

その時だった。上空から斧が振り下ろされるのに寸前まで気が付かなかった。

ズシャアアアン！！！！

さっきまで俺がいたところの地面が変形していた。

「……本当にカードの精霊つていたんだね……」

少女の軽やかな声が俺の耳に入ってきた。

見てみると、斧……ではない！！岩でできた剣を軽々と持ち上げている、2mをも超える巨大な上半身裸の黒っぽい男と……その足元には、この場には不似合いな……まるで雪の精霊を思わすような白い髪の少女が佇んでいた。

「城に帰ろうとしたら、大きな物音がするんだもん。びっくりしちゃった……けど……」

まさか花凜ちゃんの精霊が襲われているなんてね……」

「……お前……神代花凜の知り合いか？」

「知り合いつて言ったら……まあ知り合いかな？」

それよりもさあ……ここまでM&Amp;Wの精霊に危害を加えるなんて許せないな。」

微かに怒りがその言葉の中に含まれていた。

「あの鎧の人をやっちゃって！バーサーカ！！！」

「ぐおおおん！！！」

バーサーカーと呼ばれた巨漢が俺に襲い掛かってきた！！！！



## 6話 勘違いから大惨事になることってよくある（後書き）

「イリヤと紫龍が対峙してた頃」

・衛宮邸

セイバー「…なにやら外が騒がしいですが…大丈夫でしょうか、シロウは…」

凛「平気よ、平気。」

どうせ酔っ払いが不良とドンパチやってるだけよ。」

アーチャー「…それにしても騒がしすぎだと思っただがな。」

桜「神代さんには先輩が付いていますけど……」

さつき帰っていったイリヤちゃんは大丈夫でしょうか？イリヤちゃんの家がある方向ですよね？」

ライダー「問題ないわ、サクラ。」

ランサー「そうそう！あの子にはバーサーカーが付いているんだぜ

？」

凜「そうね…あのバーサーカーが付いているんだから……って……」

一瞬、静まり返る室内……

ランサー「…なあ……あの物音が聞こえ始めたのって……その……  
バーサーカー達が帰ってから……だよな？」

アーチャー「……だな。」

セイバー「リン！私は今からシロウの元へ行こうと思います！-」

凜「ま…待ちなさいよ、セイバー！-」

セイバー「何故止めるのです！？こうしている間にもシロウが暴れることしか能のない獣の餌食に！-」

凜「何も士郎とバーサーカーが敵対してないでしょ！

士郎がバーサーカーと組んで敵と戦わざる負えない状況になったとか……

……やっぱり私も行く!!」

アーチャー「落ち着けマスター。衛宮士郎なら無事だと……」

凜「アンタよく落ち着いていられるわね!!  
いくわよ、セイバー!!!」

セイバー「出陣ですね、リン!!」

ランサー「……仕方ねえな……危なっかしいから着いていつてやるか。

」

凜「アーチャー!?!何グズグズしてるの!?!行くわよ!!」

アーチャー「……了解だ、マスター。」

桜「……私たちは御留守番……か……（先輩も……みんなも大丈夫かな?）」

ライダー「……落ち着きのない人たちですね……」



## 7話 時差って計算するのめんどくさい

side デスマスク -

「……たたくサガの奴……こんな夜中に呼び出しやがって……  
これも、あの女神の嬢ちゃんが誘拐されたからだぜ……」

俺はあくびをしながら教皇の間に辿りついた。

玉座に腰を掛けているサガが自然と目に入る……

「<sup>キャンサー</sup>蟹座の黄金聖闘士、デスマスク……ただ今参上いたしました。」

「来たか、デスマスク。」

「……ってかさ、こんな夜中に何なんだよ？」

俺はテメエの命令ですつと黄泉比良坂を監視してたんだぜ？」

冥界への入り口……『黄泉比良坂』に自由に行けることができる俺……  
……と五老峰の老師と前教皇と交代で、冥界へ向かって歩く亡者の中に女神の嬢ちゃんが混じっていないか監視を続けていたのだった。

「……すまんがお前とアフロディーテに頼みたいことがあつてな……」  
「アフロに？」

アフロディーテというのは俺の悪友で、魚座の黄金聖闘士の『男』

だ。

「でもよ…アイツの小宇宙を感じねえんだけど？」

「奴には先に現地入りさせたからな。」

「……実はお前とアフロディーテに『黒炎の姫君』…つまり『神代花凜』という少女の保護を頼みたい。」

「誰だソレ？」

「うむ……実はアテナを連れ去った人物が『次の標的』と定めた人物だそうだ。」

「…名前的に日本人だろ？なら青銅のガキどもに任せればいいじゃねエか？」

「………と思い紫龍に監視・警護を任せたところ……」

「………奴は瀕死の重傷を負った。」

「マジかよ！！？」

おいおいおい……あの紫龍が負けたって！？

あんまりいたくねえが、奴は俺たち並…か以上の力を持つてるんだぜ！？

「先程まで気を失っていたが……目を覚ましたので話を少し聞くことが出来た。」

少女を監視していたところ、突然…青い騎士と白銀の鳥が襲い掛かって来たらしい。

で…こいつらは簡単に倒せたそうだが……その後から来た巨漢にやられたそうだ。」

「………どんな奴だ？」

「……2 mを余裕で越える男で、一度…拳で頭をとばしたが、再生したそうだ。」

「……なるほどな…だから俺か……」

なんでサガが俺を呼んだか分かった気がした。

物理攻撃が効かない相手なら…魂に攻撃をすればいい。

黄金聖闘士の中で魂に攻撃できるのは…俺と……乙女座のシャカと双子座のカノンくらいだ。

カノンの奴は海界の管理で忙しいし、シャカは言うことを聞かいかイマイチ分らないので、俺が出動ってことになったんだろう。

「…で、なんであとアフロも？」

「うむ……紫龍が言うには意識を失う直前に、巨漢…を従えていた少女に駆け寄ってくる一団を見たそうだ。

そのことはムウの下僕も証言している」

「……待て待て……なんで貴鬼がでてくるんだ？」

ムウの下僕…というか弟子である貴鬼ききがそこでなぜ出てくる？

あのオマケのガキは麻呂眉一族の生息地であるジャミールにこもってるんじゃない……

「実はな、紫龍の聖衣は修理中でジャミールに保管されてあったのだ。

それが突然飛んでどこかへ消えたので、あわててムウの下僕が紫龍の所にレポートしたところ…

瀕死の紫龍と、せつかく修理したのに『死んだ聖衣』とそれを囲む奴らを見つけたのだそうだ。」

「…んで特徴は？」

「まず紫龍を襲った巨漢と巨漢を従える少女の他に……  
白髪の男を従える黒髪の少女と、金髪の少女と赤い槍を持った青髪の男…の6名だそうだ。」

戦っても勝ち目がないと判断した下僕は、紫龍を連れて聖域へと逃げてきたのだ。  
サンクチュアリ

…賢明な判断だな。」

…厄介なことになって来たな……  
つまりあれか……俺だけだと不安だからアフロディーテもってことか……

「本当は物理攻撃系の奴も派遣しようかとも思ったのだが……  
生憎とそういう攻撃を得意とする奴らは感情のコントロールが出来ないからな。」

『保護』よりも『紫龍の敵打ち』を優先したら不味い……」

「…確かにな……」

シユラの奴も紫龍関係のことになるとアツくなるし、老師も弟子がやられたとなったらアツくなるだろうからな……

獅子も蠍も脳みそ筋肉だし……ん？ならアルデバランはどうなんだ？  
」

誰もが認める常識人の牡牛座のアルデバランの顔が浮かんできた。



「いや。アレは幻術に耐性がない。

敵に幻術使いがいた瞬間に、アレは終わりだ。」

「まあな……」

はあ…メンドクセえ……んで、どこなんだよ、そこは？」

まあ…アフロディーテとなら大抵の敵への対策は出来るしな……

それに行先は…おそらく日本だ。

日本つと言ったら…娯楽あり食材あり……言っちゃ悪いが聖域よりずっと暮らしも快適だ。

たった一人の小娘を保護するだけで、快適な生活が維持できるなら文句言わずに向かったほうがいい。

「……冬木市というところだ。」

side 花凜 -

「ふあゝ……よく寝た……」

眼をこすりながら時計を見ると……もう9時……

えっ……学校はって？

実は今日は土曜日なんだよな……転入してすぐ休みってなんだよ？  
まあ……別にいいけどさ……

『ようやく起きたか…主人。』

着替えが終わるころ……

ベットの側でこちらを見ている漆黒の龍……『ダーク・アームドド  
ラゴン』がいた。

「…珍しいな…お前が姿を現すなんて……」

『ホルスから頼まれてな。』

『オイラは遠くから守護するから近場は頼む』ってな。』

……ホルスに何かあったんだな…つまり。

そっぴや、昨日…土郎に送ってもらってるとき、やけに爆発音がし  
てたけど……もしかしてホルスと誰かの戦闘だったのかもな……  
んで…傷ついて精霊化が出来ないって話か……

………ったく…心配かけたくないからって嘘つくなんての。

アタシは食パンを加えながらジャケットを羽織った。

『…どこに行くつもりだ？』

「…ん？ああ…頑張っているホルスやアンタ達のために新鮮な魚を  
仕入れに港へ行くのさ。」

『港？……今から釣りか？』

釣りというのは……もう少し早い時間ではないと……』

「大丈夫だって。」

アタシはニーーっと笑った。

「たぶん、誰か分けてくれそうな人がいると思うから。」

そう言うと、玄関の戸を開いた。

7話 時差って計算するのめんどくさい（後書き）

花凜が起きた頃の衛宮邸では……

士郎「あれ？神代の奴…朝食食べに来ないのか？」

桜「そういえば…来てませんね。」

凜「まだ寝てるみたいだよ。」

士郎「なんでそんなこと分かったんだ？」

凜「キャスターに電話して、水晶を通して神代の様子を見てもらったのよ。  
もうグッスリだったみたい。」

セイバー「あのキャスターが…よく話が通りましたね。」

凜「こんな時もあるとかと、昨日…学校で葛木先生を何枚か盗撮してもらったのよ…アーチャーに。」

士郎「なんでさ!？」

凜「『アーチャーの目はタカ目』っていうみたいに目がいいから、かなり遠くからでも的確に写真が撮れるのよ。」

それに、『投影』でつくりだした…N Kとかが使いそうな最高級カメラで撮ってもらったから、ピンボケもなし!」

ライダー「…ですが…自分で撮った方が手間がかからないのでは?」

凜「……………」

アーチャー「マスターは機械オンチだからな。カメラが使いこなせないのだ。」

凜「あ…アーチャ…!!…!!何言ってるのよ…!!…」

ズシンズシン…!!

アーチャー「いててて…!!」

照れ隠しに俺を蹴るのは止めてくれ…!!」

藤ねえ「あはは!!!!

なんだかわからないけど、愉快ねえ〜」

士郎「なんでさ!?!」

衛宮邸の朝はにぎやかである……

## 8話 サバに限らず魚って新鮮なうちが美味しい

side 花凜 -

空は快晴

海風は頬に心地よく、ウミネコの鳴く声が寂しさを関わらせている……

文句のつけようもないロケーション……

午後の散歩を好む爺さんたちやマラソンを好むスポーツマンの清涼剤になりそうな冬木市の港…

しかし……

1人の暴力団関係者っぽい男によって、人の寄り付かない、魔境と化していたのだった……

でも、不思議と違和感がないのは何故だろうか……

まあ別にかまわない…アタシは自分の目的を果たすまでだ。

「ランサーさんだっけ？釣れてますか？」

声をかけると、4月末なのにアロハを着た男…サーヴァントランサーがちらり…  
つとこちらを見て少し笑った。

「たしか…花凛嬢ちゃんだったけ？  
まあ…ぼちぼちってとこだなー？」

サバ山、クロダイ4にカワハギ3つてとこだ。」

「へえ……そんなに釣れるもんなんですか？」

ランサーは大きな欠伸をした後に、少し誇らしげに笑った。

「海なんだから種類多いのも当たり前なんじゃねエ？  
…それにしても色々と混ざりすぎか……でも、まあ別に珍しいしいんじゃねエか？」

いい加減な男だ……とりあえず前もって買っておいた缶コーヒーを  
パスしてバケツを覗き込む。

確かにバリエーション豊かな魚が、狭いバケツの中をうごめいていた。

「…サバ多すぎですね。」

「何だかしらねえけどな。」

っていうか、この時期ってサバの時期だっけ？



それよりも……

「ここですつと釣しているんですよね？」

なんで『竿がけ』がないんだ……あつ……すみません……ないんですか？」

『竿がけ』というのは釣竿をひっかけるアイテムで、長時間釣りをしているときに必須だ。

釣竿って見かけによらず結構重い……それにわずかな揺れで獲物が逃げてしまうのだ。

そのために『竿がけ』……すなわち固定具は必須だと思っのだが……

「べつに敬語使わなくていいって。

『竿がけ』か？……あつたら便利なんだろうけど、俺にいらねえな。竿と糸とで様子を見るのが好きなんだよ。」

いやいや……好きだからって……

それが出来るアンタの両腕が凄いよ……力だけじゃなくて機械の……とき精密さと持続時間……

やはり一流の槍兵だからか？

「……それより、嬢ちゃんはどうしてここに？」

「あ……新鮮な魚を仕入れたくて。

土曜日だし、だれか大量に連れてくる人がいたら譲ってもらおうと思っ……」

だが…この港にいるのはランサーだけだった。

「だからクーラーボックスを背負ってんのな……  
分かったよ、サバ1・2匹ならただで持って行っていいぜ。コーヒ  
ーの礼だ」

「あ…ありがとう!!ランサーさん!!!!」

「へえ…君、魚欲しいの?」

いままで気配のなかったところから人の声がした。  
ってか…このボイスは!!!!?…っと思ひ振り返ると……

(な…なんでアフロディーテがいんの!!!!?)

だれもが女と間違える黄金聖闘士 (…とはいっても今は聖衣着用  
ではなく私服だが…)…魚座のアフロディーテがほほ笑んでいたの  
だった!!!!

side ランサー -

振り返るとそこにいたのは、この港に不似合いな美女だった。  
ってかここまでの美女はそうそう目にかかるもんじゃねエぜ!!  
?スカートはいてりゃもつといいのによオ……

「えっと……お兄さんは何をしに?」

おい……花凛嬢ちゃんよオ……これのどこが男なんだよ?  
すると、美女は驚いたように眉を持ち上げた……ほらな、怒られ……

「どうして私が『男』だと分かったんだね?」

……はい?否定しねエのか?

「なんとなく……です。」

「……ってかマジで男かよ……こんな美人なのに……」

俺の言葉にカチンときたのかもしれない。

美女……オツと間違えた、美男子は顔をしかめた。

「えっと……どうしてこちらに?」

「ココの辺りで知り合いと待ち合わせしていてね。」

「……その……知り合いってどんな人ですか?」

「そうだね……そのお兄さんみたいな青い髪で、人相の悪い蟹みたいな男だよ。」

どんな奴だよ！？蟹みたいって……想像つかねえ……

「（蟹って言うたら……デスマスク！？なんでここに……）

へえ……蟹みたいな人って面白い表現ですね！！

でも……なんでこんな港で待ち合わせなんですか？あ……聞いちゃいけないらしいですけど……」

「実は仕事だね。これ以上は言えないんだよ。」

話せない仕事……か……最初は映画の撮影か何かかと思ったが……殺し屋か？なんとなく強そうなオーラだしてるしな……

「……そうですか……。」

「それよりも君……腕の力が強いみたいだね。」

『竿がけ』も使わないで釣りをしているなんて……」

この美男子も花凛嬢ちゃんと同じことを言ってきた。  
まあ……槍使いだからな。

「まあな。」

こいつなら俺の仲間内で負ける気はしねえよ。」

「へえ……あつ……でも、アーチャーさんも釣りが得意そうな雰囲気

あるんだけど。」

「花凛嬢ちゃん…あのコピー馬鹿と一緒にしないでくれ。」

あんな釣りという男の世界を知らねえような奴には負けねえって。」

「口は災いの元だよ。」

花凛が心配そうに口にする。

へっ！そうだとしても俺は釣で負ける男じゃねえっての！！

俺は大口を開けて笑ってやった。

「平気平気。バレねえって。」

「おい、待ったか、アフロ〜〜！！」

向こうから走ってくる不良風の男がいた。

……どこが蟹なのだかは分からないが、青い髪の人物なんてそうそういないから、おそらくアレがこの美男子が待っているという人物だろう。

「アフロ？」

あ…花凛嬢ちゃんもそこ気になってたか………どっからどう見てもあの美男子はアフロじゃない。

髪はフツーに長いし…サラサラヘアーだしな。

「ああ…私の愛称さ。」

あまり好きではないが私の名前は『アフロディーテ』なのでね。」

「なるほどな…『美の女神』か……」

アフロディーテは苦笑すると懷から2輪のバラを取り出した。  
手品か！？と突っ込みたくなるくらい鮮やかな出し方だった。

「御嬢さんとお兄さんにコレを上げよう。  
連れを待つ退屈しのぎに付き合ってくれた礼だ。」

それは深紅に染まった美しいバラだった。  
…正直、男から花なんてもらったところで嬉しくもなんともない。  
が、せつかくくれるというので貰ったほうがいいのか？

「すみません…その……いりません。」

ためらいがちに…それでもきっぱりと断る花凛嬢ちゃん。  
女っ気ねえな…バラが嫌いなのか？  
アフロディーテは少し顔をゆがめた。

「嫌いか？」

「い…いえ…バラは高貴で凜として好きですけど……  
その……なんというか……毒とかありませんよね!？」  
「待て待て待て、なんで毒なんだよ!？」

思わず突っ込んでしまった。いや…普通は毒なんてないだろ。たかがバラだぞ？

「なんか…直感！女の勘って奴？」

「信憑性ねえな……ってか失礼だぞ。」

初対面の相手に毒バラを渡す奴なんて………」

ここで俺は口を止めた。

そっいえば…この嬢ちゃん自身はしらねえが、命を狙われてんだよな……

昨夜、この嬢ちゃんの使い魔であり守護者……まあなんかのカードの精霊とか言っていたが……それが鎧の少年によってボロボロにされてたのを思い出す。

鎧の少年の方はバーサーカーにやられて、仲間の少年の救援でどこかに行ってしまったが……危険が去ったというわけではない。

もし…こいつらが嬢ちゃんの命狙ってる奴らだったら……

「かったるいな、アフロ。」

アフロディーテが待っていた男がめんどくさそうに口を開いた。

「そっちの兄ちゃん気が付いてるみたいじゃねェか。」

「!?!」

「ひゃあ!?!」

俺は釣道具を放り投げると、嬢ちゃんを抱えて2人と距離を取った。

「い…いきなり何すんだよ、ランサー!?!」

「わりいな嬢ちゃん。」

あいつらさ…嬢ちゃんを狙ってるみたいだ。」

「は…はあ!?!?つか…まさかこいつ等がストーカー!?!?」

いや…ストーカーって嬢ちゃんが言ってるのは昨日の少年だろうが…黙っておくことにするか。

「ひでえな、ストーカーって…俺たちはお前さんを保護しに来たんだぜ?」

保護しに来たやつが、こいつの守護者を倒すのか?

つと言ってやりたかったが、昨日の『ホルス』とかいう守護者が『主人には教えないでくれ』って言っていたのを思い出し、何も言わないことにする。

「な…なんで…?」

「状況確認は後だ。嬢ちゃんはさっさと家に帰りな。」

ここは…俺が食い止める!?!」



俺は瞬時に武装に切り替え、『サーヴァントのランサー』の姿に戻り、深紅の色をした刺し穿つ死棘の槍、『ゲイボルグ』を構えた。

「ら…ランサー？」

「説明している暇はねえ！！行け！！！！」

「隠密に済ませたかったが…仕方ない…舞え『ピラニアローズ』  
！！」

アフロディーテが黒バラを繰り出してきた。

そのバラはまるで意志があるかのように舞い…俺たちの退路を塞いだ。

やべえ……絶望的ってやつはこういうことを言うのかもな……

そう思った時だった。

ズドオオン！！！！

突然、どこからともなく放たれた攻撃が黒バラを霧散させた。

爆炎が収まりうさんさせた主が姿を目にした時、俺はため息をつき

たくなった。

「…虫の知らせがしてな。どこぞの駄犬より釣りの腕が良いということ<sup>を</sup>証明しに来たら……」

ずいぶんと賑やかな祭り会場になっているではないか…ランサーよ。

「

そこに立っていたのは、高級釣道具を背負<sup>サーヴァント</sup>つてはいるが、弓を構えている白髪に褐色の肌をした男……アーチャーだった。

9話 心臓を買かれても一応生きていたアテナって凄い

side 花凜・

……やばいやばいやばい……！

ってかさ、なんでアタシ命狙われてんの！？

しかも、黄金聖闘士に……

とりあえず、あの場合はアーチャーが助けてくれて……ランサーとアーチャーが黄金聖闘士の相手をしてきている間に逃げてきたんだけど……

……気になるから港までこっそり戻ってきてしまっていた……

『主人……逃げないのか』

『……せつかくあの2人が逃がしてくれたのに……なぜ？』

そう言って姿を現した精霊は、『混沌の黒魔術師』と『ダーク・アイムドドラゴン』……。

「……だって……相手は人間規定外の強さをもった黄金聖闘士だよ！？  
たしかにサーヴァントも十分規定外の強さの持ち主だと思うけどさ  
……」

そう言つて、こつそり木箱の陰から、先程までいたところをチラリ……と覗き見ると……

「『ロイヤルデモンローズ』!!!」

「っは!そんなバラなんかに負けるかよ!!」

アフロディーテの赤薔薇を、回転させた赤い槍で粉碎していくランサーの姿があつた。

……が……アーチャーの姿が見えない……。

同じくデスマスクの姿も見えないから……たぶん、デスマスクの技『積戸気冥界波』で冥界の入り口……『黄泉比良坂』に飛んでいったのだろう。

『……どうしたのだ、主? 深刻な顔をして……』

「……いや……アーチャーもデスマスクも好きなキャラだから死なせたくないな……って

同じことがアフロとランサーにも言えるんだけどさ……」

Fateのキャラも魅力的で好きなキャラが多いけど、黄金聖闘士だつて負けないくらい魅力的で好きなキャラが多い。

いや……デスマスクとアフロディーテは人気の少ないキャラでYah o!の人気投票でも、あまり高くなかつたけど……でも、『力こそ正義』つていう信念や独特な戦闘スタイル……それに外伝であるLCの彼らの前世である蟹座と魚座を見て……それから一気に好きになったキャラ達だ。

……全員……ここで死なせたくない……

そう思っていると、混沌の黒魔術師がため息をついた。

『仕方ない……主のために一肌脱ぐとしよう……』

side アフロディーテ

「……つぐ……なんだこれ……身体が……」

ようやく目の前の青髪青タイトの槍使いに魔宮薔薇デモンローズの毒が効いてきたみたいだ。

通常の人間ならもう少し早く効いてきているはずだったが……  
姿からして『普通で無い』ように、彼自身も『普通ではない』らしい。

とはいえ……聖闘士のモノとは違う『普通ではない』感じた。

「身体が自由に動かせないのだろう？」

君は私の『ロイヤルデモンローズ』を全て粉碎していたが……いく  
ら花卉を壊しても香りは多少は残るのだよ。」

「…つちくしょ…さっきの甘ったるい…臭いは…」

目の前の男は悔しそうな顔をしている。

さてと……このまま殺すか…それとも生け捕りにするか……

たぶん…相方のデスマスクの方は、さっき彼と対戦していた白髪の男と遊んだ後に、男を躊躇なく冥界の穴へと突き落としているだろう。

だったら…殺すより生け捕りにして、情報を集めた方がいい。幸いにも毒は効いているみたいだし…

「…こんな…ところで…負けるかよ…!」

男が槍の持ち方を変えたようだ。……一体…あの動きにくい身体で何をしようというのだろうか？

「『ゲイ…ボルグ』…!」

「…!?!?!」

赤い槍が私目がけて襲い掛かってきた…!!

side ランサー

「はあ……はあ……」

先程までアフロディーテがいた場所に土埃が立ち込めている……

考えてみると、あの男勝りの嬢ちゃんを助ける義理は俺にない……でも……なんとなく『助けてやりたい』と思わせる雰囲気っていうのがあるんだよね……

あのセイバーにも勝てるくらいなんだから、全然心配しなくて良さそうなのに……

……少しでも逃げる時間を稼いでやろうって思っちゃった。

だから俺の宝具『刺し穿つ死棘：ゲイボルグ』を使った。これなら俺の身体の内自由とお構いなく……俺の魔力だけで相手の心臓を突き刺すことができる。

「ほう……面白い槍だね……」

「！？」

は……馬鹿な……なんで俺の槍を受けたのに……あの煙の向こうから声がするんだ！？

その時…煙の向こうから黄金の光がチラリ…と見えた気がした。

……まさか……

あのセイバーが海に落とした…黄金の鎧を着た英雄王・ギルガメツ  
シュの呪いか！？

「はあ…はあ…『ゲイボルグ』って確か…サガが昔教えてくれ  
た…けど…

アイルランドの『光の御子』が使う…槍…で…心臓を貫く…槍…だ  
った…はずだ…」

荒い息をしながら姿を現したのは…黄金の鎧を身にまとったアフ  
ロディーテだった。

一応、『ゲイボルグ』は彼に当たっていたが、すんでのところで避  
けたのか、心臓から少しずれた…型の辺りが貫かれた痕跡があった。

「っへ…これでも…まだ立ってられんのか…？」

化け物かよ…人間だろ？こいつ…人間を越えた力を持つてるぜ？  
そんな俺の驚きとは関係なしに、アフロディーテは俺の技から得た  
情報を考えているようだ。

「…君こそ…毒が効いているのに…まだ動けるとは…  
『ゲイボルグ』を使えるということは…『ケルト神話』に登場す



る…光の御子…

『クー・フリーン』……まさか……お前たちは『ケルト』の者が！？  
『ケルト』の者が『アテナ』様を攫ったのか！？」

……いや……確かに俺は『ケルト神話』に出てくる英雄だけだよ

……  
他の奴らはケルトじゃねえし、そもそもアテナってギリシャ神話の『戦勝の女神』だろ？

なんでそんな奴を『ケルト』が攫わねえといけねえんだ？

「……だんまりか……  
まあ構わない。…情報を得たところだ……そろそろ…お仕舞にしよう。」

そうやって奴は一輪の白薔薇を取り出した。

「ブラッディ・ローズ……！！」  
「……っ！」

一瞬だった。

一瞬で奴の手から放たれた白薔薇が俺の心臓を貫いたのだ。

「……この技は……私流の…ゲイボルグ…といったところだ。  
残念だった…みたいだな……」

……ちくしょ……まさかこんなところで……

意識が……どどん闇に沈んでいく……

わりい……せつかく受肉したのに……俺はもう退場みたいだ。

さっさと座へと帰るとするか……さすがに嬢ちゃんもかなり遠くへ

……

「ランサー……!」

……嬢ちゃんの声が聞こえた気がするが……気のせいだろうか？

声の方を向こうとしたとき……なにやら暖かい感じの空気が俺に触れた。

「ば……ばかな……その小宇宙は!？」

なんか遠くでアフロディーテの奴が驚いている声が聞こえる……

それと共に、身体が楽になっていく……

ああ……俺は死ぬんだな……

俺の意識はここで……

「ほら、馬鹿犬！！！起きろって！！！」  
「誰が馬鹿犬だ！！！！」

ガバリッと起きて、声の主を殴る俺。  
声の主は痛さを堪えた涙目で俺を見た。

「よかった…それだけの元気があれば、ランサーはもう平気だな！」  
「！」

につこりと笑う嬢ちゃんがいた。

……あれ？なんでこんなに意識がはっきりしてんだ？

9話 心臓を買かれても一応生きていたアテナって凄い（後書き）

星矢「なあ、なんでランサーは『馬鹿犬』って呼ばれてたんだ？」

士郎「知らないのか？」

『ケルト神話』でランサー…クー・フリーンは『猛犬』って意味なんだ。」

瞬「…一応、修行時代に他の神話についても学んだと思うけど……」

星矢「俺はそんな覚えねえな。」

魔鈴さんの生きるか死ぬかの修行の日々だったから……」

桜「な…なんか遠い目になってますよ？」

氷河「ふ…修行時代か…懐かしいな…  
わが師の教えは最高だったな……」

凜「……こっちはこっちで意識がトリップしてるわよ。」

瞬「…気にしないでください……」

10話 黄泉比良坂って神話だと桃の木があるのに、どこを見ても見当たらない

- side デスマスク -

………つたく……こいつ何者なんだよ？

俺は思いつきり後ろに跳躍して攻撃をかわした。

………俺が黄泉比良坂に連れてきた白髪に褐色の男は普通ではなかった。

だいたいこの黄泉比良坂を見ても眉1つ動かさねエ奴なんて初めて見たぜ。

俺でさえ初めてココに来たときには吐き気がしたのによお……

この禍々しい死の臭い……無気力で虚ろな目を持った死人の列……絶えず冥界の穴へと落ちていく人々の悲鳴……あまり心地よい場所とは言えない。

そんな場所にいきなりとばされてきたのにもかかわらず……目の前の男は淡々と俺だけを狙ってくる。

「つく……！」

「………かすつただけか………」

俺にかすり傷を与えた白髪は、軽い舌打ちをした。  
光速の速度で動く俺に、少しずつだが動きについていけるようにな  
ってきている…  
ろくに小宇宙も感じねえのに……何者だよ一体…？

「つてめえ…名を名乗れ！！」

「名乗るほどの名なんて持つてはいないさ。」

「…本当か？にしちゃあ結構強ええじゃねエか？」

奴の剣を避け光速拳を繰り出す俺。

「ぐっ！！」

…一応まだ当たっているみてえだが……最初より見切られている……

少し遊んでやろっかなあゝっとか思っただけで最初から致命傷を狙わな  
かったのが仇になったかもしれない。

今、致命傷を狙った拳を繰り出しても、避けられてしまっただろ…。

……こいつあ…百戦錬磨の剣士だ。こういう奴相手にするなら俺よ  
りもシユラとか獅子のガキの方が向いているってんだよ。俺はあく  
まで亡霊専門だからな……って言っても一応肉弾戦は出来るし好き  
だけどな。得意って程じゃねえんだよ。

…何にしろ、このままだと完全に見切られるまでに時間がかからな

いだろう。

めんどくさいし、習得したばかりだから使う気はしなかったが……仕方ない。

魂ごと火葬してやるか……

……最近習得した蟹座の奥義……

歴代の蟹座が操ってきた敵の魂を糧に鬼火を作り出す技……

俺は奴に向かって指を向けた。

「積尸気鬼……」

「そこまでだ！……！」

鋭く低い声が響き渡った……と思ったら、俺と白髪の間に入影が割り込んできた。

その人物は白髪より奇妙な格好をしていた。

黒髪に変な帽子みたいなのをかぶっていて……同じく漆黒の衣装を身にまとっている。

なんか杖みたいなのを持っているし……顔が蒼いし……って……

なんだよ、蒼い顔って……！！

「……人間……じゃねえな。何者だ！？」

「……吾は『混沌の黒魔術師』。主の命により、戦いの休止とアーチャー殿の救出に参った。」

「…俺は助けを頼んだ覚えはないんだがな。」

ムツとしたような感じで白髪…アーチャーは『混沌の黒魔術師』をにらんだ。

が、魔術師は平然とした顔を崩さない。

「…悪いが…吾は主に逆らうことは出来ない。  
このまま引かせてもらおう。」

魔術師はクルリ…っと杖を一回転させると姿を消した…アーチャーとかいう白髪と一緒に…

「うち…逃げやがったか…」

…アレは…アイツらは人間なのか？

いや…俺たち聖闘士も人間とは言い難いけどよオ…まっ…一回は取り逃がしたが、俺たちの目的はあいつらじゃない。目的は神代花凜とかいう嬢ちゃんだ。

俺は黄泉比良坂から出て、もとの小せえ港に戻ってきた。

……そこには……



「アフロ!？」

黄金聖衣を纏って倒れていた友人の姿があった。  
アフロディーテ  
ってか…聖衣が血まみれじゃねエか!!

「おい!!しっかりしやがれ!!」

「……耳元で煩い…もっと静かにしろ、蟹。」

うつすらと目を開けたアフロディーテ。  
多少呼吸は荒いが、命に別状はなさそうだ。

「まったく……弱きものは放って置くのが道理というものではないのか？」

「そりゃそうに決まってるだろ？」

だがよ……テメーを放って置いたらウルセエ奴らがいるだろ。  
……で、誰にやられた？」

それを問うとアフロの奴は苦しそうな顔をした。

「…致命傷を与えたのはランサーという先程の全身青タイツの男だが……」

私を動けなくさせたのは、花凛という少女だ。」

「……はあ？」

何言つてんだよ……あんななんの能力もなさそうな嬢ちゃんに……？  
ってか保護対象じゃなかったのか！？

「……動けるようになるまでにはあと数刻……といったところか……  
そうしたら一度、私は聖域に戻る。調べなければならぬことがある  
るのでな。」

その時、俺は気づいたことがあった。

確かにアフロの奴の聖衣は血まみれだし、心臓に近い辺りに穴が  
いていた。

しかもそこから致死量に達するかもしれないほどの血が噴き出した  
ような跡があった。

なのに……今はすっかり止血して、こんなに出血する傷口があっ  
たとは思えなくなっていたのだった。

つまり誰かが治療したということ……

しかも……このレベルともなると、アフロディーテ本人が痛みと戦い  
ながら、ここまで完全に治癒できるとは思えない。

……一体誰が……

問いかけようとしたとき、アフロディーテは深い眠りに落ちて行っ  
てしまった……

…まあ寝息立ててるから生きてんだろ。

「…まったく…男背負う趣味ねえのにな。」

俺はアフロディーテを背負うと、土曜のくせに人のいない、港をあとにした。

10話 黄泉比良坂って神話だと桃の木があるのに、どこを見ても見当たらない

星矢「ハッピーバースデイ！！俺！！！！」

プレゼントでP Pもらったぜ！！さっそく『タイガーころしあむ』をプレイするぜ！！

そのあとは何しよっかな〜！！あ…その前に、菓子準備ねとな！！

菓子食べながら暖かい部屋でゲーム……うん！！最高だな！！」

士郎「テンション高いな……」

紫龍「…違うな…無理にテンションを上げているのだろう。」

せっかくの誕生日なのに出演がこのコーナーしかないのだからな。」

凛「私達はほとんどのキャラの誕生日が明らかになっていないから、その点は気楽でいいわよね。」

紫龍「ところで…そのゲーム機は誰にもらったんだ？」

星矢「いいだろ〜！！沙織さんがくれたんだぜ！！」

士郎「…へ…へえ…よかったな!!」

(…あ…あれって…この間、慎二が売ってた奴にそっくりだ…)

桜「よかったですね!!」(あれって…兄さんが使っていたP Pじやあ…)

ライダー「『知らぬが仏』というものです、マスター。」

星矢「?なんのことだ？」

凜「気にしないでいいわ。」

星矢「?…まあいいや…ってかさ!!その…お前たちは…」

士郎「!!…そうだ!!…今からバイトが入ってたから帰る!!」

桜「あ…私も部活が…」

紫龍「…すまん…春麗に早く帰らないと小言を言われるのでな。」

星矢「……………」

「その頃、星の子学園では」

美穂「星矢ちゃん…せっかく誕生日パーティーの準備しているのに……………」

星華「…きっと、他の所でお友達と一緒にお祝いしているんですよ。」

美穂「…そうね…………仕方ないからこのケーキは食べちゃいませよ！」

星矢「…………せっかくの誕生日なのに……………」

12月1日は主人公の星矢の誕生日

…………だが、今年は1人で迎えるようである…………



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6434y/>

---

Fate/Gold Saint 黒炎の姫君

2011年12月1日13時53分発行